ロジェ・バイヤン著 きだ・みのる訳「掟」（おきて）における翻訳の吟味

きた・りょうゆう

翻訳文学の流行は島国日本の奇観であるが、外国文学作品の乱暴な翻訳は流行して貰いたくないものだ。ここに取上げるものは1957年のフランス・ゴンクール賞受賞作品として第二次大戦後のヨーロッパで最も広く読まれたというRoger Vailland, La Loi (Gallimard) の日本語訳（講談社刊）である。訳者きだ・みのる氏は「気違部落周遊紀行」で有名な人物であり、「もしもこの小説を日本語にするとすれば、自分こそは適任者であるに違いないと思って」この翻訳に従事したと自ら述べている。わたくしは文学には素人であるが、本書がイタリアの法と社会を見事に描き出していると思うので、原作と翻訳とを対比しながら精読してみた。その結果考えさせられた最も重要なことの一つは、訳者というものは自分の先入主で原作に立ち向ってはならぬということだ。この翻訳は、卒直に云って、訳者の気違部落の妄想で猛り狂っている。イタリアの法と社会を無視し、フランス語の文法や文脈を棚上げにして、自分勝手な早合点をしているようだ。翻訳というものがいかに難しいものであるかを、訳者は反省したことがあるのだろうか。以下訳書の前半の一部からわたくしの吟味した諸点を例示する。わたくしの印象では、原作もその前半が優れていると思ったので、とくに注意して読んだ次第である。

「ポルトー・マナコールの裁判所」 (la préture de Porto Manacore)。このイタリア地名は実在しないが、やはりイタリア読みにして「マナコーレ港」と訳すべきだ。原作に出てくるその他のイタリア地名はすべて実在するが、実在の地名ならば尚更イタリア読みにすべきである。マナコール港は実在しない

とはいえ、原作を精読すれば、周囲の実在地名からして略々そのモデルとなつた土地は見当がつくのである。

「一階は監獄、二階は警察署、三階は裁判所」(au rez-de-chaussée la prison, au premier le commissariat de police, au deuxième le tribunal)。「監獄」という訳語は古いし、又このような下級裁判所の場合には「拘置所」と訳した方がよい。但し、日本の下級裁判所と異って、警察署と一体になっているその全体を裁判所というのであるから、「三階は裁判所」というと、裁判所の中に又裁判所があることになって、妙な話になる。原文も用語を区別している筈だ。「三階は法廷」と訳すべきである。ヨーロッパにおけるこうした警察裁判所では、軽犯罪の被疑者に対する予審訊問の結果その者を拘禁することができるけれども、重犯罪の被疑者に対しては文字通り予審をするだけで、公判をするのではない。従って、日本の下級審とは異るわけである。

「イタリア風には職なしたちは」(les disoccupati)。原文を見ない人は、どこがイタリア風なのかと訝るかも知れない。

「八月の太陽、獅子王の太陽」(le soleil d'août, le solleone)。ここにこそ「太陽獅子とイタリアで言う」を入れよ。

「空に向いて中ば開いている空気流通の格子窓」(les jalousies de la prison, entrebâillées vers le ciel)。格子窓が空に向いて開いたら、囚人たちはみんなそこから逃げ出してしまうだろう。一体、格子窓が半ば開くだろうか。これは、拘置所の板すだれが小札(こざね)を上向きに開いてある状態をいうのだと思う。このような板すだれは、元来イタリアのものだが、小札は拘置所だから上向きに開いているのである。況んや「空気流通」などという語は原文にない。

「五階の判事の自室で、ドンナ・ルクレジアが……眼を醒した」(Dans sa

chambre du quatrième étage de la préture donna Lucrezia a été réveillée)。先ずイタリア人名はイタリア読みにして「ルクレチア様」と訳すべきだ。ドンナも生のままではこの場合感じが出ない。又原文には「判事の自室」とは書いていない筈である。「裁判所五階の彼女の部屋で」である。更に、「眼を醒した」時期が訳文では違っているようだ。

「ベッドに長くなり、片肱で顎を支えている」（à demi allongée sur le lit, appuyée sur un coude)。顎という語は原文に見当らないし、又「半身に」という語を訳していないので、これでは身体の傾斜度が原文と違ってくる。その程度の傾斜で、すぐ次に書いてあるように胸がはだけるわけがない。

「最下級の司法官の妻」（l'épouse d'un magistrat de dernier rang)。magistrat というのは、先述の下級裁判所の下級判事のことであって、「司法官」では漠然としすぎる。法律制度を知らないための誤訳である。

「ローマ人の皇后たちのように」（comme l'impératrice des Romains)。先ず、単数を複数と間違えている。次に、「ローマ人の皇后」というのは直訳だ。「神聖ローマ帝国の皇后様」と訳すべきである。

「海はつい向うにある」（La mer est là)。前後の関係から考えて、これでは文意が続かない。突如としてそんなことを述べる必要があろうか。海がつい向うにあることぐらいは、初めからわかり切っているのだ。これは、「海はいつもの通りで」何の変り映えもしないことを言ったものであろうと思う。

「デル・ヴェッキオ・アルベルトー著、皇帝フレデリック二世の治世について、トリノ版」（Del Vecchio Alberto, La Legislazione di Federico II Imperatore, Torino。）人名を珍しくイタリア読みにしたのは良いが、原文には「治世」と書いてない筈だ。「立法」と訳すべきである。トリノ版という訳語も、

おかしい。「トリーノ市」のことだ。

「本の主人公はローマ人の皇帝、ナポリ、シチリア、プウイユの王のスアブ家のフレデリック二世だ」(Frédéric II de Souabe, empereur des Romains et roi de Naples, de Sicile et des Pouilles, au XIIIe siècle, est son héros。)「十三世紀に」という語が訳文では脱落している。「ローマ人の皇帝」という訳語は、おかしい。皇帝はドイツ人なのである。「神聖ローマ帝国の皇帝」と訳すべきだ。ナポリ、シチリアがイタリア読みで、プウイユがフランス読みだというのは、一貫しない。これはイタリアで「アプーリア」と呼ばれる地域のことである。「スアブ家」というのも、おかしい。ドイツ読みにして「スワビア」とすべきだ。フレデリック二世は、そこの出身なのである。

「女中は階段の扉口で、或は牢屋の書記室で……眠り込んだに違いない」(La domestique doit dormir…… dans la cage de l'escalier ou au greffe de la prison)。階段に扉口があるわけはない。階段に「吹抜け」はあるけれども。「牢屋」に「書記室」というのも、どうかと思う。「拘置所の事務室」といった方がよい。

「皆はまだ昼寝の重たい眠りを眠っている」(tout le monde dort encore, du lourd sommeil de la sieste)。何と生硬な日本語訳であろうか。何故、「誰もがみんな昼寝どきで、まだぐっすりと眠っているところである」と訳せないのだろう。

「彼女は暴れ、うまく彼を押し退ける、だが彼はやはり彼女の体を押しつけている」(Elle se débat et réussit à le repousser. Mais il reste tout contre elle)。うまく押しのけたのに、まだ体に体を押しつけられているわけがない。ここは、「彼女はもがいて、うまく彼を振り切った。が、彼は依然として鼻先にいた」という意味であろう。contre の誤訳をしたことと、訳者自身が何か

の先入主をいだきすぎて、体と体をくつつけすぎたせいである。下品である。

このあたりで、主な登場人物の名前の呼び方を訂正しておこう。「ルクレチア様」については、先に一言した。「ドン・セザール」（don Cesare）は「チェザーレ様」、「ジュリア」（Julia）は「ユーリア」、「エルヴィール（Elvire）は「エルヴィラ」、「マリエット」（Mariette）は「マリエッタ」、「ギウセッピーナ」（Giuseppina）は「ヂュゼッピーナ」、「マテオ・ブリガンテ」（Matteo Brigante）は「マッテオ・ブリガンテ」、「ピザッキオ」（Pizzaccio）は「ピッツァッチオ」、「ドン・ルッゲロ」（don Ruggero）は「ルッヂェロ様」と呼ぶのがイタリア読みである。この点、訳者は滅茶滅茶である。

「彼は近衛騎兵大尉であった」（il a été capitaine de la cavalerie royale。）近衛騎兵ではない。たんに「イタリア王国騎兵隊」のことだ。イタリアは敗戦後共和国になったので、王国時代の軍隊には royale をつけて区別してあるだけのことだ。日本で「皇軍」というのと似ている。近衛騎兵なら別の言い方がある筈だ。

「この円柱の家の玄関の前の土手の下を水が浸している」（baigne le terre-plein, devant le perron de la maison à colonnades）。玄関前に土手があったら、さぞかし出入に不便であろう。又、原文には「土手の下」とは書いてない。更に、「円柱の家」では、はっきりしない。イタリアによくある「柱廊付きの家」のことだ。その戸口の階段前にあるテラスにまで水が寄せている状態を、ここでは言っているのである。

「ポルトー・マナコールの砂浜」（la baie de Porto Manacore）。「砂浜」ではなくて、「入江」である。訳者は本書で終始この誤訳を一貫している。

「マリエットは後座席に両手をかける」（Mariette pose les deux mains

sur le guidon)。「後座席」ではなくて、「ハンドル」である。

「アレッサンドロ判事の子供たちとドンナ・ルクレジアが騒いだので眼が覚めた」 (Il fut réveillé par les enfants du juge Alessandro et de donna Lucrezia)。完全な誤訳である。ルクレチア様は騒がなかった。彼女は却ってその騒ぎを母親として取鎮めたのである。ここは、「アレッサンドロ判事とルクレチア様との子供ら」即ちこの夫婦の子供らが喧嘩騒ぎをしたので、彼は眼が覚めたのだ。

「父親はフォッギアの傍の県の司法関係の首都のルッェラの司法官だ」 (Son père est un magistrat de Lucera, la capitale judiciaire de la province, près de Foggia)。やたらに「の」が続くのは、稚拙で見苦しい。訳者は、各所でこういう拙劣な訳をしているが、これでは飜訳者としての資格がない。訳文を読んで、「フォッギア」と「ルッェラ」との行政区画上の関係位置がわかるだろうか。ここでも、地名はイタリア読みにして、「フォッヂア」と「ルチェラ」とすべきだ。「フォッヂア」市の「傍の県」というものがあろうか。又、「司法関係の首都」というものがあろうか。ここは、フォッヂア市の近くにあるルチェラ地方裁判所管内の下級判事であることを言ったのだ。これらは実在の地名である。地図を見ながら、訳すべきである。

「十八世紀の古文書」 (les archives du XIIIe siècle)。明白な誤訳で、指摘するまでもない。

「ドイツ人ピストル銃隊」 (reîtres)。どこを押せば、そんな迷訳が出てくるのだろう。訳者は、フレデリック二世を何世紀の人物と考えているのか。十上己にピストル銃隊があっただろうか。reîtres はドイツ語の Reiter からきた語で、ドイツ騎兵隊のことだ。ピストルの歴史を調べて見ると、「ピストル銃隊」 (pistoliers) が出来たのは、十六世紀の後半のことで、記録によると

1554年のものが一番最初である。reîtres が pistoliers を意味するようになったのは、その頃からであるようだ。従って、フレデリック二世の生きていた十三世紀の頃にはピストル銃隊がなかったと解すべきである。訳者はどうもフレデリック二世をいわゆるフレデリック大王（十八世紀）と誤解している節がある。いやそんな詮さくすらしなかったのかも知れない。

「意気地なし、と彼女は叫ぶ」（Femminuccia ! crie-t-elle)。これは女のマリエッタが男のトニオに向って云った言葉だ。しかし、Femminuccia が女性名詞であって、Femminuccio という男性名詞でないところからすれば、これはトニオをきめつけた言葉でなく、マリエッタが小娘の自分を「つまんない」とする自嘲の気持を現わしたものではなかろうか。

「わたしだけワンピースで、どんな気がすると思う？」(De quoi ai-je l'air, en robe de plage?)。ワンピースではない。旧式のビーチ・ドレスのことで、新式の水着（みずぎ）と区別されるのだ。又、「どんな気がすると思う」というのは正確でない。「一体全体、わたしがどんな恰好か」と、不服を訴えているのだ。

「奥さんが現代と共に生きることを望まないんですもの」（Il ne veut pas que vous viviez avec votre temps)。とくに婦人の会話で、こんなごつい表現が日本語としてありうるだろか。それに、この訳文では奥さんが望まないみたいである。前後の続き具合を少し工夫すれば、「奥さんを御時勢に遅れさせても、構わんですって」と訳すのが良いと思う。

「脚がルイ十六世調の大理石のテーブル」(table de marbre à pieds Louis XVI)。「何々が何々の」という助詞の用法は、日本文法を誤っている。会話ならまだしも、このような敍景文では正確な文法によるべきだ。序に、「ルイ十六世風の脚」というものにもう少し訳語を補って、どんなものであるかを示さなければ、一般読者に不親切となろう。ルイ十六世風の特徴がある筈だ。それ

を研究せずに、フランス語を日本語にただ移すだけのことなら、誰でもできる。これは優美な脚なのだ。実物を見よ。

「アンナは昔からの呪(まじな)い、人差し指と薬指で角(つの)をつくる」（Anna fit les cornes avec l'index et l'auriculaire, conjuration classique）。人差し指と薬指とで角が作れるかどうか、やって見るがいい。手品師でなければ、薬指が言うことを聞かぬだろう。原文には「人差し指と小指とで」と書いてある。その方が角らしく見える筈だ。

「ギウセッピーナは……ブラジャーをタンポ紙の古新聞の間にたたんだ」（Giuseppina plia dans un vieux numéro du Tempo le soutien-gorge…）。人名の発音間違いのことは、すでに一言した。ここでは「タンポ紙の古新聞」という訳語を問題にしよう。タンポ紙とは、余り耳に聞こえの良い紙でない。これはイタリアの有名なホーム雑誌で、「時(イル・テンポ)」（Il Tempo）という題名のものだ。大型であるが、決して新聞ではない。実物を知らずに訳すと、とんでもないことになる。

「各階の階段口には暗い隅っこがいくらもある」（Les paliers sont pleins de recoins sombres）。階段口に暗い隅っこがあるわけがない。又、そんなものが幾つも存在せねばならぬ必要があろうか。この建物は、むかしアンジュ王家の宮殿であったのだ。そのことをよく考えてみれば、「各階段の中休み段には暗く引込んだ所が沢山ある」わけが、わかるだろう。原文も、そう書いてある。研究不充分。

「この動作のため彼女の下腹は彼の下腹にはりついていた」（du même mouvement elle collait son ventre à lui）。「彼の下腹」とは原文に書いてない。余り下腹に力を入れるのは、下品である。たとい事実はそうであろうとも、表現は別だ。文学的センスが訳者には欠けているようだ。

自動車の銘柄の呼び方について。「ギウレッタ」（Giulietta）は「ヂュリエッタ」、「オーレリア」（Aurelia）は「アウレリア」、「フィアットのミル・ツェント」（Fiat Mille Cento）は「フィアト一一〇〇」とするのがイタリア読みである。とくに最後の「ミル・ツェント」という発音は、前半がフランス読みで、後半が怪しげなイタリア読みで、滑稽である。「ミッレ・チェント」と読むべきだ。しかし、それよりも数字で「一一〇〇」と訳した方がよい。実物を見ても、そのように数字で示してある。

「その時間の使い方は調べられたが怪しい点はなかった」（…dont l'emploi du temps avait été contrôlé）。直訳すれば、「彼らの時間極りの仕事は管理されていた」というのであって、「番人の見ているところで時間通りいつもの極り仕事をして行つた」二人の農夫のことを言っているのだ。訳文では、何か誤解しているようである。警察が取調べをしたことではない。

「何か艶話でもあったのかい、と署長は……訊ねた」（Elle a eu une histoire ici? demanda……le commissaire）。「艶話」という訳語は眼に読んでわかるが、耳に聞いてわかるだろうか。そんな難しい漢語は日本の日常会話で余り使われないだろう。会話は、なるべく耳言葉で訳すべきだ。「あの女は、ここで男出入（おとこでいり）があったのかね」と訳したら、どんなものか。

「ローマのスイス領事館はチギ宮に運動を始めていた」（Le consulat helvétique de Rome avait fait une démarche au Palais Chigi）。「チギ宮」ではない。「キヂ宮殿」である。ここは、共和制イタリアの外務省の所在地となっている。そのことを訳文にも示しておかなければ、一般読者に対して不親切であろう。

「親愛なる友よ、最も親愛なる、と署長は言った」（Caro amico, caroissim, dit le commissaire）。こんな訳文は、生硬でキザである。もっと工夫すべき

だ。手紙文ならまだしも。

「水は小舟を支えてくれない」(l'eau ne porte pas)。「小舟を」とは原文に書いてない。この porter は他動詞ではないと思う。「水はどんより淀んでいる」という意味ではなかろうか。文章の続き具合からしても、そうだ。

「鉄砲を担ぎながら」(fusil au bras)。鉄砲は担ぐものとは限らない。「鉄砲を小脇に」である。

「ディオメドの伝説にある鉄鶏」(des oiseaux de fer de la légende de Diomède)。これで読者にわかって貰えるつもりだろうか。せめて、「ギリシヤ伝説に出てくる勇士ディオメデスの仲間が化してなったという『鉄の鳥』」というぐらいに訳すべきだ。まことに不親切。

「社会党員」(un socialiste)。アレッサンドロ判事は社会党員でないし、又イタリアに社会党という名の政党があるわけでもない。ここは、たんに「社会主義者」と訳すべきだ。

「没収だ、没収だ、と判事が叫んだ」(confisquons! confisquons! s'écria le juge)。何と情ない判事だろう。法律用語の使い方も知らぬとは。「没収だ」ではなくて、「押収しようじやありませんか」というところだ。

「署長は民主カトリック派なんだ」(Le commissaire est démochrétien)。「民主カトリック派」などという一派ではなく、「キリスト教民主党」という大政党で、現にイタリアの政権を担当しているのだ。訳者は毎日、新聞のどこを読んでいるのだろう。

「これは女の半日分……の値段だ」(c'est le prix d'une demi-journée de

travail de femme)。「女の値段」とは何か。原文には、「女子労働半日分の値段」と書いてある。妙に下品な思わせぶりの訳をするものではない。

「バー・スポーツのスカッチ半杯分の値段だ（だがバーでは誰もそんなものは飲まない。瓶がそこにあるのはマナコールの海水浴場からの注文が来る日のためだと皆は思っている)」(le prix……d'un demi-verre de scotch au bar des Sports〔mais personne n'y boit jamais de whisky ; la bouteille est là pour le jour où la plage de Manacore prendra, comme on dit〕)。この訳文は我慢がならぬ。「バー・スポーツ」というと、読者は一体どんなスポーツだろうと訝るかも知れない。バーでやるスポーツみたい感じがする。イタリアへ行って見ればわかることだが、この種の酒場では Sports Café という看板を出しているのだ。「スカッチ」という発音も気にくわない。大体が発音の滅茶苦茶な訳者がこんなところでアメリカ発音の愚かな真似をしなくともよい。「スコッチ」と言えば、立派なものだ。「そんなもの」とはどんなものか。原文には、ちやんと「ウィスキー」と書いてあるではないか。一番いけないのは最後の一文である。文脈を完全に取り違えている。comme 以下を全文にひっかけたのは、根本的な誤りだ。comme 以下は、たんにその前の prendre にかかるだけである。全文の意味は、「尤も、ウィスキーの瓶は、マナコーレ海岸が人々のいうように『受けた』日のために、そこに置いてある」ということだ。

「連中はオッギ誌の中でサン・トロペスではそんな風をしていると写真で見た通りの身装をしているのだ」(ils s'habillent comme ils ont vu dans Oggi qu'on le fait à Saint-Tropez)。「サン・トロペス」ではなくて、「サン・トロペ」である。これは、フランス南岸の避寒地だ。又、「オッギ誌」ではなくて、「オッヂ誌」である。週刊誌『現代』と訳した方がよいと思う。この週刊誌は、小型の新聞のような体裁である。イタリアで実物を見ればわかることだが、色刷りではないのである。従って、そこに掲載された写真を見ても、ネッ

カチーフの色までわかる筈がない。それなのに、訳者はこの訳文の直ぐ前に「原色のハンケチ」について述べ、それからこの訳文では、これが「写真で見た通りの身装」だと言っている。原文では、別に「写真で見た」とまでは書いてないと思う。

「ウリアの聖ウルシュルの廟」(le sanctuaire de sainte Ursule d'Uria)。「ウルシュル」はイタリア読みにして、「ウルスラ」とすべきだ。

「シロッコとリベッキオ」(le sirocco et le libeccio)。熱風の名であるが、訳者は全然イタリア語を知らぬと見える。「リベッキオ」ではなくて、「リベッチオ」である。ci と chi の発音上の区別を無視してはいけない。

「シロッコは沖に雲を漂わせ、それをリベッキオは押し払おうとする」(Le sirocco maintient au large les nuages que le libeccio pousse devant lui)。でたらめの訳文である。二種の風に動かされる雲の様子がよくわかっていない証拠だ。ここは、「リベッチオが運んでくる雲を、シロッコが外海に閉め出す」という意味である。尚、訳者は「海の微風」とか「陸地の風」とかという訳語をしきりと使っているが、これらは「海軟風」と「陸軟風」のことではないか。

「沖で戦う二つの風は浜風をすべてさらって行った」(les combattants du large avaient aspiré tout l'air de la baie)。「浜風」とは原文に書いてない。「入江の空気を全部引き抜いた」ことを言つているのだ。

「ポルトー・マナコールの浜では海はじっとしている」(dans la baie de Porto Manacore la mer ne bouge pas)。本書において、訳者は一貫して baie という単語を「浜」もしくは「砂浜」と訳しているが、これでは plage との区別がつかない。どうも baieと plage とは同じものだと信じ込んでいるようで

ある。驚くべき語学力だ。

「大きな町では特別な会社が書類揃えを引受けている」（Dans les grandes villes, des officines specialisées se chargent de la recherche des documenti)。「特別な会社」とは大袈裟だ。書類の取得斡旋を専門にするダフ屋のことであろうと思う。

「大工のマリオ」（Mario le maçon)。マリオは大工ではなく、煉瓦職人である。

「しかし刑は特赦されて、パスポート請求に添えた抄本にも書いてねえでさ」（Mais la condamnation a été amnistiée. Elle n'est pas mentionnée sur l'extrait de casier judiciaire que j'ai joint à ma demande de passeport)。訳者は「刑の特赦」が何であるかを知っていないようだ。特赦ならば、pardon particulier か pardon spécial という筈だ。原文は amnistie すなわち pardon général なのである。つまり、煉瓦職人マリオは失業者たちをそそのかして、オッタヴィオ様所有の荒地に集団的に無断居住した。彼は事件の首媒者として十五日の刑に処せられたが、彼の外にもこの事件で刑に処せられた者がいる筈である。このような一定の犯罪を犯した者などの一定の集団に対して行われる pardon が amnistie なのであって、「大赦」と訳される。これに反し、個々人に対するものを「特赦」というのである。本件の場合、「刑は特赦され」たのではなく、原文に言う通り「大赦された」のであるが、しかし煉瓦職人マリオの言葉として訳すのに、そんな難しい詮議をしなくてもよいだろう。ただ「赦された」でよいと思う。それをわざわざ「特赦された」と訳すと、煉瓦職人に笑われるだろう。とにかく、訳者は法律用語を偉そうに持出す柄ではない。それが証拠に、「パスポート請求に添えた抄本」などと、又してもごまかしている。何の抄本か。原文に犯罪人名簿（casier judiciaire）の抄本と書いてあるではないか。訳し忘れたとは思われない。「旅券発給申請書に添えて出した警

察調書」ぐらいに、全体を訳したら、どんなものだろうか。やたらに下品な「べらんめえ」調で気分を出した訳をするよりも、そういった点に注意した訳を心掛けるべきだ。

「わしにも、もう言うことはないな」(Je n'ai plus rien à dire)。この訳文は、紛わしい。「他(ほか)に何も言うことはないよ」と素直に訳したらどうか。有名人になると、素直さを失うものだ。

「ロバの頭、情けないロバの頭だ」(Tête de mule, sacrée tête de mule)。何という情ない訳文か。「しぶとい野郎だ。この片意地者め」といったところだろうが、訳者はロバの頭を出さねば気がすまぬようである。

「これは王国海軍のクォーター・マスターだった男だ。……敗戦後、生れ故郷に戻ってくると彼の統制を住民に押しつけた」(C'est un ancien quartier-maître de la Marine Royale. Il imposa son contrôle dès son retour dans la ville natale après la défaite)。「クォーター・マスター」などと英語を持出すと、どこの国の海軍かということになる。勝手な訳語をつけるものではない。掌帆兵曹と訳す方がいい。「彼の統制」というのも、適当でない。軍隊生活の経験がある人なら誰でも、「掌握」という言葉を思い出すだろう。あの「掌握」がこの場合にぴったりだ。飜訳もしっかり掌握したらどうか。

「マテオ・ブリガンテは統制の余り、ピッゼリア小僧のピザッキオまで統制し、惑溺し、補佐として使うことにした」(Matteo Brigante a tellement à contrôler qu'il a débauché Pizzaccio, le mitron de la pizzeria, et l'a pris à son service comme contrôleur en second)。人名その他の呼び名のイタリア発音が滅茶苦茶であるのはともかくとして、「統制し惑溺し」とは原文のどこに書いてあるのか。この一文全然意味が通じないので、次にわたくしの試訳を示す。よく対照されたい。「マッテオ・ブリガンテは非常に沢山の掌握仕事が

あったので、ピッツア屋の小僧ピッツァッチオをおびき出して、配下の大幹部に採用していたほどであった。」 つまり、助手を要したのだ。

「闇の統制者ブリガンテ」（Brigante, le racketer）。「闇の統制」などと言うと、戦時中や終戦直後の日本の耐乏生活を思い出す。「ゆすりのブリガンテ親分」と言った方がよい。

「ピザッキオは元小僧の仇名だ。これは『出来損いのうどん』と飜訳出来る」（Pizzaccio est le sobriquet de l'ancien mitron ; cela pourrait se traduire par ≪pizza à la manque≫）。そんな出来損いの飜訳はやめた方がいい。訳者はピッツァというものを食べたことも見たこともないらしい。イタリアの食べ物だというので、直ちにスパゲッティを連想し、そこから「うどん」と訳したのであろうが、ピッツァは一種のパイであって、スパゲッティとは全然異るのである。アメリカあたりで、ピッツァという看板を掲げた食堂へ入って、スパゲッティを食べて、これがピッツァというものだと早合点して帰ってきた日本人がいる。訳者は、その類だ。この本文の場合は仇名であるから、「ピッツァ崩れ」とでも訳した方がよいだろう。「ピッツェリア」（Pizzeria）というのは、そのピッツァを焼く店で、食堂も附いているのが普通である。「ピッツァ屋」でわかりにくければ、「ピッツァ食堂」と訳してもよいだろう。但し、訳者のやったように、「ピッゼリア」という間違った発音をしないことだ。

「決めたらよ、おまえのうどん（ピッザ）がのびるぜ」（Vas-y. Elle est cuite ta pizza）。これで名訳のつもりらしい。わたくしは、どうしても、ピッツァが「のびる」状態を想像できない。それは不可能である。この訳文は気違沙汰である。

「マリエットは二重の意味のある彼の話に挑戦的な笑いで答えた」（la jeune fille répondait par un rire provocant à ses propos à double sens）。「二重の意味」とはどんな意味か。これでは、わからぬ。わたくしならこう訳す。

「敵にしても味方にしても怖い彼の舌先三寸に、挑発的な笑声で、小娘のマリエッタは応酬した。」

おきて遊びの親方を決める道具である tarots のことを「トランプ」といってみたり、「カルタ」といってみたりするのは、訳語の不統一だ。「カルタ」に統一しては、どうか。何となれば、tarots というのは、イタリア式カルタのことで、七十八枚一組のものだ。

「ナポリ銀行に当座を持ってる」 (tu as un compte à la Banque de Naples)。「当座」とは原文に書いてない。訳者は「当座」と「口座」との区別を知らぬらしい。慶応大学では、教えないのか。

「アンコーン軍港」 (ancône)。イタリア読みにして、アンコーナとすべきだ。

「ピザッキオよ、裏門ピッザよ」 (Pizzaccio, pizza retournée)。「裏門ピッザ」とは何か。retourner という単語がどうして裏門に通じるのか。先述の通り、訳者はピッツァがどんな食べ物であるかを知らないから、そんな裏門解釈をするのだろう。ピッツァを焼くときは、retourner してはならないのだ。それを引っくり返すと pizza retournée になる。この語によってピッツァ食堂のピッツァッチオを軽侮しているのが原文の意味するところだ。

「トニオはドン・セザールの……金玉を握っているような顔をしているが」 (Tonio se fait passer pour l'homme de confiance de don Cesare)。「きんたまを握る」とは原文に書いてない。訳者は自分の下品好みを読者に押しつけたいらしい。その欲望で本訳書は終始猛り狂っている。試みに、原文の調子から外れた訳者の乱暴な次の訳語を見れば、その荒れ方が一層よくわかるだろう。「お嬶あたちを抱く」「処女のあそこ」こんな調子外れが随所に見られる

のである。そして、訳者は「あとがき」でこう書いているのだ。「読んでいるうちに私は奇妙な興奮を感じた」と。全く奇妙である。

「松の太い枝々に吊られた白、青の電球」（Les globes électriques bleu-blanc, qu'on a suspendus aux branches maîtresses)。これでは、白い電球と青い電球と二種類あるように受取られそうだ。「青白い電球」と訳すべきである。

「ビュフェの周りの幾つかの椅子」（quelques tables et chaises autour du buffet)。「テーブル」が脱落している。この種の不注意は、本訳書に非常に多く見出される。所詮、やっつけ仕事としか思われない。例えば、その次の一節では、「二人は舞踏会の全景を手に取るように眺めることができた」という一文がごっそりと脱落しているのだ。忘れたのではあるまい。

「この地方の金持たちは夏の休みは北部の海岸アブルズの山の避暑地に行って過ごしている」（les riches de la région passent leurs vacances sur les plages du Nord ou dans les stations de montagne des Abruzzes)。「アブルズ」ではなくて、「アブルッチ」である。アブルッチの山々は北部の海岸にあるのではない。「北部の海岸かアブルッチの山々で休暇を過ごしている」のだ。

「これは専らその心臓と意見によってのことである！（cela dépend de leur coeur et de leurs opinions)。「心臓と意見」というのは妙な組み合わせだ。「めいめいの感じ方と考え方」という風にでも、訳せぬものか。

「マリエットと結婚するか、年金をやらねばならなくなる」（Vous n'aurez le choix que de l'épouser ou de lui faire une pension)。「年金」というのは、おかしい。女を犯しておいて、その女に年金を出すというのか。「扶助料！と言った方がいい。強姦年金という制度は、聞いたことがない。

「署長さんは北部の連中は確かにエスプリが欠けていると思い込む」 (Le commissaire pense que les gens du Nord manquent décidément d'esprit)。わたくしはエスプリが欠けているせいか、こういう訳文には不賛成である。一般読者も「エスプリが欠けている」といわれてもわからぬだろう。フランス語を少しばかり解する連中は、すぐにこんな日本語らしからぬ日本語を濫用して得意になっているが、その方が余程「エスプリが欠けている」のではないか。飜訳をする以上は、できるだけ読者にわからせるように努力すべきだ。フランス風を余りに吹かせるものではない。この小説は、イタリアを舞台にしているのだ。しかも、フランス人にとってはむしろ異様に感じられるような南イタリアのラテン的世界を描き出しているのだ。わたくしならば、本文を次のように訳す。「北部の人は確かに血の巡(めぐ)りが遅い、と署長はつくづく思う。」 訳者も、少しその方だ。

「絶対に否。しかし万事は支払わねばならん。特別な天賦を受けついだ者に自然は他の何かを拒んでいるものだね」(Absolument pas. Mais tout se paie. A ceux qui héritent d'un don particulier, la nature refuse quelque chose d'autre)。飜訳をする以上は、フランス語を解しない読者にも読ませることを念頭に置かねばならない。「万事は支払わねばならん」では、何のことかわからん。「何事にも代償がつきものでしてな。特別な天分を授かった者には、天が別の物を与えるのを差控えるのです」と訳しては、どうか。「天は二物を与えず」という考え方は一種の配分正義だが、それを代償の論理で、つまり交換正義で説明してから、展開している。難しく言うと、そういうことだ。

「気をつけなさい。才能のある人間には心が欠けている」(Faites attention. Les gens doués manquent de coeur)。余りに直訳に過ぎる。「気をつけなさい。能のある人は、情がないんだから」とやったら、どうだろう。

「おきて遊びは確かに面白い動き方をしていた」 (La Loi prenait décidé-

ment bonne tournure)。稚拙である。「『おきて』は、正に佳境に入ろうとするところであった」と、訳せぬものか。

「この貧乏人の遊び」（ce jeu de pauvres)。そんなことはあるまい。この遊びに参加している連中は、どれも貧乏人でない。それどころか、ルッヂェロ様のように、長者の息子もいるのだ。ここでは、「この嬲(なぶ)りもの遊び」という意味だろう。全く pauvre な飜訳だ。

「だが運の向きが突然変って、なぶられ者に味方をしはじめることは、失望を招くのが絶対的な規則だというのではない」（Ce n'est cependant pas une règle absolue qu'il faille regretter que le sort, changeant soudainement d'humeur, se mette à favoriser la victime)。何とややこしい訳文であろう。「運命が突然むら気を起して、犠牲者の味方をし始めるのは、必ずしも残念がるに及ばぬことだ」とやったら、いけないのだろうか。

「体の調子が悪いんです、とトニオは言った」(Ça ne vas pas, dit Tonio)。このとき、トニオは或は身体の調子が悪かったかも知れぬが、原文には別に身体の調子まで書いてない。彼はルッヂェロ様から「おまえは出て行く権利がない」といわれたので、「それはいかん」と断ったまでだ。原文通りに訳せば、そういうことになる。Ça ne vas pas という表現は、ドイツ語の場合（Es geht nicht）でも、そういう意味だ。足止めを食ったトニオは、踏みとどまって尚も遊びを続けるのに耐えれそうにないと感じたので、そういう意味の言葉を吐いたのである。身体の調子が悪かったかどうかはともかくとして、気分的にもう耐えられなかったのである。身体の調子が悪いと感じたのは、もっと後になってからのことだと、わたくしは思う。つまり、遊びが終って、酒場から出て、大広場へやってきてから、へどを吐くときだ。

「これは軽裁判所の管轄だ」（Ça relève du tribunal)。「軽裁判所」など

という言葉があるだろうか。原文にもそんなことは書いていない。

「おれはみんなに所有されているんだ。おれにやあよく解ってるんだ。みんなに所有されてるって」 (Vous me possédez, je sais bien que vous me possédez)。これが、みんなに取り囲まれて引き戻されるときのトニオの言葉だとは思われない。深夜静かに自己反省して書いた日記の一節みたいである。「やったなあ。よおし、やったなあ」と訳したら、訳し過ぎであろうか。

「おめえは股に何も無えんだ」 (Tu n'as rien dans le ventre)。この同じ文章を、訳者は他のところで、「腹にや何も入っていねえ」とも訳している。一体、どちらが正しいのか。股と腹とでは大違いだと思うが、誤植なのだろうか。そういえば、本訳書では、「腰」 (les reins) というのを「腕」と訳しているほどだから、お話にならない。「腰を使って」と言うべきところを「腕を使って」と言っている。これは大事なところだ。ともかく、ここの原文は「おまえは勇気がない」という意味ではないのか。

「彼は痩せ、乾き、きついのであった」 (il est maigre, sec et dur)。これは、「痩せて、ごつごつして、柔かみのない身体つきである」という意味、つまり骨ぶしが堅く筋張った痩身を指しているのだと思うが、訳者の訳ではさっぱり感じが出ない。

「法王アンニバレ・デルラ・ゲンガ」 (pape Annibale della Genga)。「アンニバーレ・デッラ・デェンガ」と発音すべきである。法王というのは正確でない。「教皇」という方がよい。

「枢機僧ベネヴァン」 (archevêque de Bénévent)。「ベネヴェント」と発音すべきである。枢機僧というのは正確でない。枢機卿という方がよい。

「古代の遺物の分類と蒐集をはじめていた」 (avaient commencé à collec-

tionner et à classer les antiques)。「蒐集と分類」だ。分類してから蒐集するという人がいるだろうか。

「ヴィクトール・エマヌエル二世」（Victor-Emmanuel II)。「ヴィットリオ・エマヌエレ二世」といった方がよい。

「この館はカラルンガが商業の中心地であった時代、町のずっと上手の方、飾りの無い教会と商人の家との間の小さな地所につっ立っていた」（Le palais était juché tout en haut de la ville, sur une petite place, entre une austère église romane et des maisons qui avaient appartenu à des marchands, quand Calalunga était un centre commercial)。これは、どう考えても、誤訳であると思う。「カラルンガが商業の中心地であった時代」を全文に引っかけたのが、根本的な間違いである。だから、その時代における館の位置と現在における館の位置とが異っているとでも言っているような印象を与えるのだ。館はその時代以後に何処かへ引越したわけではない。quand 以下はたんに maisons にかかるのだ。即ち「カラルンガが商業の中心地であった昔のころに商人たちが持っていた一群の家々」と、それから「渋いロマネスク式の教会」との間の一郭に館は立っていたのである。そして、その一郭は町の丁度最高地点であるので、館はちょんとそこに乗っかったように見えるのだ。それで、juché と言っているわけである。しかも、カラルンガそのものが山上の町であることを思えば、尚更この表現は生きてくるだろう。それを「つっ立っていた」などと訳しては、ぶち壊しである。

「カラーレの玉葱は砂丘の中で一つの大きな白い花、匂いのある無心の星形花を抽き出す」（L'oignon de Carrare pousse au milieu des dunes une grande fleur blanche, une étoile parfumée, candide)。「カラーラ」と言った方がイタリア読みに近い。全文をもっと美しく訳せぬものか。「カッラーラの玉葱は砂丘のあいだに大きく白い花を咲かせる。あどけなく、香ぐわしい、星のような花だ。」

訳文に「システム」とか「タイラント」とかいう日本製英語を濫用するのは不適当である。そう英語を知った振りをするものではない。「コンコルダ」(le Concordat) という訳ならぬ訳も、イタリア読みにして「コンコルダート」とすべきだ。それよりも、「政教条約(コンコルダート)」と書いた方が遙かに親切だ。

「ドン・セザールは永遠の下り坂という悪い時期に生れた」(Don Cesare était né sur la mauvaise pente de l'éternel retour)。「永遠の下り坂」ではない。チェザーレ様がヂャムバッティスタ・ヴィコ(訳者によれば、ジャン＝バチスト・ヴィコという)の著述を読んで作り上げた歴史哲学によれば、神政時代・英雄時代・民主時代が永遠の回帰をなしているというのだ。だから、「チェザーレ様は流転輪廻(るてんりんね)の末世(まつせ)に生れ間違った」だけである。訳し間違えぬようにして貰いたい。

「ウンベルトがポルトガルに亡命するとき、空席には庶民と僧侶を残しておいた」(Umberto, en partant Pour le Portugal, laissait place libre à la plèbe et aux prêtres)。ウンベルトという語は初めて出てきたのだから、「国王ウンベルト」と訳すぐらいの親切があっていい。国王だから、「亡命」というよりは「蒙塵」といった方が良いだろう。又、訳者はしきりと「僧侶」とか「坊主」とかいう勝手な訳語を用いているが、そう訳さねば日本の読者が理解し難いのならばとにかく、理解できるのならば素直に「牧師」と訳すべきでないか。

「彼女は妹に鼻の下で言う」(Elle lui parle sous le nez)。まことに原文通りの訳であるが、さて日本文としてはどうであろうか。この鼻は彼女の鼻か妹の鼻か。鼻の下には口があるから、そこで喋ったのだろうと妄想する人もいるかも知れない。つまり、「鼻の下で言う」という訳文はまずいのだ。「彼女は妹の顔をまともに見つめて」とか何とか、その接近感を日本語らしく表現する必要がないだろうか。

「町の警吏は警棒を手に持ち、グッリオーニたちを見張っていた」（Les vigiles urbains, la cravache à la main, guettaient les guaglioni）。それは日本の警察のことだ。ここでは、「警棒」でなくて、いわば「警鞭」である。「グッリオーニ」も、「少年愚連隊」とか「ちんぴらやくざ」とか訳した方がよい。「グッリオーニたち」というと、尚おかしい。何となれば、guaglioni という単語自体が複数だからである。単数は guaglione である。「一本のスパゲッティ」というのがおかしいのと同じである。

「みんなドン・セザールとこのトニオがどんなことがあればといって署長に話しているのか訝った」（On se demandait de quoi le Tonio de don Cesare pouvait bien parler au commissaire）。訳文よりも原文の方がわかり易い。トニオは元来口下手なのである。みんなはそのことを知っている。だから、トニオが署長に何か話しをしているのは、みんなにとって不思議な光景なのである。このあと又しても訳者は一文を脱落させている。「トニオはあえぎあえぎ喋っていたが、やっと口に出したその言葉は殆どこそこそ話のようになった」という一文である。

「アッチリオ署長は気が滅入るような感じだった」（Le commissaire Attilio se sentait triste）。トニオの告げ口を聞いて、何故アッティリオ署長の気が滅入るのか、わたくしにはわからないのである。triste という言葉の意味が問題だと思う。訳者は、このあとで Le commissaire regarda tristement Tonio という一文を、「署長は気の毒そうにトニオを眺めた」と訳しているが、わたくしの感じでは「処置なし、手に負えぬ」といった気持がそのときの署長の気持ではなかろうかと思うのである。

faire la loi という表現について。訳者の訳語は、ところによってまちまちである。作者がとくにこの表現を好んで用いているのだから、訳語にも一貫性をもたせておくべきだ。「天下を取る」と訳してみたり、「掟を作る」と訳し

てみたりでは、一貫しない。全文を通読してみて、これは独断的命令的に「下知を言渡す！ことのように思う。情婦が男に、又親分が手下に faire la loi するのである。尤も、本訳書における訳語の不統一は、これに限ったことではない。一番滑稽なのは、同一地名が別々に発音されていることだ。「サン・トロペス」といってみたり、「サントロペツ」といってみたりはまだしも、「トリノ」と「チュラン」とが同一地名だとは一般読者にはわかるまい。「農業技師」がいつのまにか「農林技師」になったりもしている。

以上の吟味は、原作の八十七頁、訳書の六十九頁までのなかからの例示にすぎない。全部で原作は三百頁を越え、訳書は二百五十頁近いのである。全部について訳書の欠陥を挙げつらったならば、きりがない。有名人である訳者の労作に対して素人のわたくしが失礼な言葉を沢山並べたが、最後に一つだけ強調しておきたいことがある。それは、「読む資格」と「訳す資格」とは別問題だということである。一方は読む人の個人的問題であるが、他方は読ませられる多くの人々に関係する社会的問題であるといっては、大袈裟であろうか。この点を弁えない飜訳文学が流行すると、島国日本の島国性はいよいよ漫画化してくる。有名人は余程慎重な態度で飜訳に手を出すべきである。訳者きだ・みのる氏は「あとがき」で、「私は著者ロジェ・バイヤンがどんな経歴の人物か知らない」と告白している。全く無暴という外はない。何となれば、わたくしはこの書評を行うに当ってすら、原作者ロジェ・バイヤンの経歴と著作を調べたし、又飜訳者きだ・みのる氏の経歴と業績をも調べたのである。そんなことぐらいは、凡そ物を書いて発表する者として当然果さなければならない最小限度の義務であるからだ。この程度の飜訳を売り物にする有名文士こそ、諺に言う「詐欺師」である。　　(一九五九・一・一)

(追記) わたくしは法律教師であるので、このような書評を行うのは越権行為かも知れぬが、常日頃外国語に興味をもつている者の一人としてこれを書いてみた。わたくしの書いたことに正しいところがあるとすれば、それはかつてフランス語の手ほどきを個人的に与えてくれた松尾正路教授のおかげである。

(リュクサンブールにて)